

「旅館再建と金田一温泉郷の再生」



株式会社座敷わらし
(二戸市)
代表取締役

五日市 洋

緑風荘について

緑風荘は昭和25年、二戸市の金田一温泉郷に元々あった築300年の南部曲がり屋の母屋を改装し、旅館として開業しました。開業後は高度経済成長期とも重なり、団体客などで物凄い賑わいで緑風荘もその流れに乗り次第に施設を拡大していきました。

ところがバブルが崩壊すると、各地でそうだったように、みるみるうちに景気が悪くなり客足が途絶えていきました。緑風荘もそのありを受け、倒産寸前まで追い込まれました。それを救ってくれたのが、当家に残る「座敷わらし伝説」でした。

当家の先祖にあたる「亀麿」は、その昔後醍醐天皇に仕えていた藤原藤房の長兄で、幼くして亡くなり当家の守り神、座敷わらしになったという云い伝えがあります。

「座敷わらし」に出会えた人は大変な幸運

に恵まれると云われ、実際、座敷わらしが棲みついていると云われた奥座敷「槐の間」には平民宰相原敬や米内光政などの総理大臣経験者、はたまた本田宗一郎や松下幸之助など世界的な経営者、遠藤周作や水木しげるなどの文化人など名だたる著名人が宿泊しており、それが口コミで広がり徐々に経営も回復して行きました。その後マスコミなどで数多く取り上げられ「槐の間」は3年先まで予約で一杯になるほどでした。

火災そして再建

ところが平成21年10月、失火により旅館が全焼。自宅も兼ねていたので全てを失いました。ただ一つ奇跡的に残ったのが、座敷わらしを祀っている「亀麿神社」でした。

火災後直ぐに全国の常連さんや地元の人な

ど多くの方々から再建を望む声が寄せられ、「3年で再建しよう」と決意したものの、東日本大震災の影響や、発注していた設計会社の倒産などもあり中々計画が思うように進まず、只々年月だけが過ぎていきました。

そのような中で再建寄付を募ったり、少数私債を発行するなどして資金集めを黙々と進めていきましたが、それらの資金に加え自己資金と融資を合わせても、あと数千万円が必要でした。

そこに岩手銀行さんからクラウドファンディングを利用してみないかと提案があり、最後の頼みの綱とばかりに飛び付きました。火災から約7年という長い時間は掛かったものの必要資金を確保し、平成28年5月、ようやく営業再開に漕ぎつけました。



再現された「槐の間」

資金面から全10室の小規模旅館にしたことで、結果的にお客様一人一人に目が行き届くようになったことは良かったと言えます。「槐の間」も再現はしましたが、以前のように宿泊部屋としてではなく、共有スペースとして、全てのお客様に開放しました。それは第一に、座敷わらしは部屋に出るのではなく人に出ると言われているから。第二に、「槐の間」を地域の宝として多くの方々に見てもらいたかったからです。

オープン当初は待ちわびた多くのお客様が殺到し連日満室となりましたが、徐々に落ち着いてきました。オープン特需は1年と予想

していましたが、本当の経営は昨年からでした。

今は初心に戻り、目の前の一人一人のお客様を大切にして快適に過ごしてもらい、また泊まりたいと思ってもらえる宿にすること、それだけに集中しています。それを達成するためにはあらゆるサービスを研ぎ澄ましていかなければなりません。接客、食事、温泉施設。そして周りの環境も重要です。特に、この金田一温泉郷が魅力ある温泉地とならなければ、お客様に選んでももらえません。

今後の旅館と金田一温泉

今後の抱負としては、旅館としては、当初計画を断念していた露天風呂や宴会場の設置、それからグレードの高い客室を数室増築していきたい。また周辺の農家さんと連携して新たな名物料理や特産品の開発も進めていきたいと思っています。

ここ金田一温泉郷では、今年から公民連携による街づくりがスタートします。市と民間が出資した街づくり会社が、既存の日帰り温泉施設の建て替えと今後の経営を行い、交流人口の拡大と地域活性化を図るものです。Park+PFIという手法で周辺の公園も整備され、温泉郷中心部が見違えるほど変わってくると思います。これにより岩手県内や青



再建された緑風荘

森県南部の周辺地域は素より、東北、関東圏、北海道まで広く集客を図ることで、周辺に自然発生的に様々なお店が出来て、昔とも違った新たな賑わいを創出するのが目標です。

公民連携による日帰り温泉施設には、新たに簡易宿泊施設も併設されます。旅館としてはライバルとしてではなく、共栄共存していく施設として受け入れる必要があります。そしてエリア全体としての魅力を高め、日本人、いや世界中の人たちの憧れの温泉地となるように頑張っていきたいと思っています。